

ドグニャ

吉弔八千慧
鬼傑組組長

勁牙組の犬どもが
随分と荒らしまわって
くれましたね

早鬼……
あの馬には少し
調教が必要です

畜生界
動物霊が支配するこの地獄で
縄張りを巡る抗争が激化している

ここでは人間霊は被捕食者である
僕が運よく生き延びているのは
吉弔八千慧に飼われる奴隷だからだ

人間

そのゴミを片付けた後
部屋に来なさい

組長が僕に向ける目は
カワウソ霊達が見せるそれよりも
冷たく 生きた心地がしない

その組長が部屋に呼ぶなんて
どんな恐ろしい事が待っている
ことか……

そう思っていたのだが

舐めろ

いつもみたいにな

吉弔組長が僕を呼ぶ
目的はバター犬
要するに自慰の補助
として使うためだ

もう慣れたものだが
それでも緊張する
誤って傷でもつけて
しまったら 命はない

むわっ

ビクッ

あ

ズルズル

息遣いや体の反応を見て
ここぞという所で舌を抜き

そのままクリトリスを
根元からなぞり上げる

い

舌でGスポットをコリコリと
突き撫でる ゆっくりと時間をかけ
優しく……

アレを
破ってしまったわ
ないように……

トントントン



ふう 今回も
"アレ"は無事だ

処女膜破れるのが
怖くてオナニーも
自分一人できないなんて

鬼傑組組長の
姿かこれが…

こほんっ

いりりっ



あ 終わったわ 命

ふる

ふる



…あなたに
ちようどよい仕事を
与えます

光栄に思いなさ

助かったか…?

ひゃい

はい



くっ 必ずや
吉弔組長がおまえをッ

吉弔組長に命じられたのは
勁牙組でのスパイ活動だった

既に入り込んでいた
カワウソ霊のおかげで
うまいこと驪駒組長の
奴隷として飼われることになった

…が そのカワウソ霊が
今握りつぶされたところだ

おいおい
何匹入り込んでんだ

にゃアッ

驪駒早鬼
勁牙組組長

吉弔…
こそこそと汚い奴

人間…
部屋に來い

はい…

あの敵意すら
感じる鋭い目つき

もしかして
スパイであることが
バレた?!

部屋に行ったら
一体何が…?!

ナニがっ?!



そう緊張しなくていいぞ
簡単な質問がしたいだけだ

君は吉弔のこの
スパイなのだろうか？

フリュッ

フリュッ

えっ いや
そそそそんなわけ
あるわけないじゃ
ないですかあ

ふむ しかし
君のコレは
動揺を隠せていないが？

どうなんだん？
聞こえないぞ？

ふにふに

バレてる……

それよりも
この状況は 何

クツ

息ができない
死ぬ……(死んでるけど)

ピタッ

死ぬ

息が

クチュッ

クチュッ

なんだ？
必死に腰を振って

そこに射精しても
子はデキないというのに

ふふ 死を意識して
生殖本能が働いたか？

クチュッ

この射精が
おまえの自白だと
受け取ろう

で そんなおまえに
とっておきの
仕事があるのだが…

どろお…



?!

バチョッ

僕の息子をより満足させたほうが
勝ち...というところらしい
それでいいのか?畜生界

どうだ?
蹂躪される気分は

こんなの
耐えられる
はずがない

バチョッ

早鬼め
勝手に
始めるとは...

八千慧の
貧相な身体では
こうはできまい

ギョウカ

さあ
勃たなくなるまで
搾り取ってやろう

ひん!!

いん!!

ビクッ

ドツキ

ドツキ

ドツキ



あなたの 身体の弱点は 把握済みなんですよ

な...ア 卑怯だぞッ

ぐわっ

奴隷

腰を動かして このでか馬を 無様に啼かせなさい

い 今動くのはア ナシだあ...アッ

速く!

もっと激しく!



射精せ!

あつはア 無様な声...

ほー

終わったら さっさと抜け!



あつはア 無様な声...

あつはア 無様な声...

あつはア 無様な声...



あー愉快
で 次は私の番か

ももう
勃ちませえん

…私の
初めてをアゲル♡
と 言ってもか？

は？

うお
フル勃起

すん



なんか悔しくて
勢いで言っちゃったけど
やっぱりコレを
挿入るのは怖い…

きゅん

怖いからわざわざ
コイツに舐めさせてたのよ

やっぱり
別のやり方で…

ふん

ふん

くいん



あ...
ああ...

やあーつと卒業
できたようだな
八千慧

ポッ



んっ

自分で言ったことだ
ちゃんと実行しないと

ポッ
ドッ



あーっ
あーっ

さあ 君
八千慧の初体験だ
責任持って孕ませて
あげなさい

あーっ
あーっ

カスどもがア
こんにオッ



あっ
動けなっ

さあさあ
双方盛大にイって
くれたまえ

あーっ
あーっ

人間っ あッ
止めなさいイ
これはアこの
吉弔八千慧の
命令ですよ
おッ



止まらなくなったぞ
壊れたかな

ふふ
記念に撮って
おきましょう



一方そのころ
饕餮尤魔は
とんでもなくデカイ肉に
かぶり付いていた

終